

て一日を過し申候。

○同十一日第廿三回文科學術談話會は講堂に於て開催せられ候、右は雜報欄内記事御覽下され度候。

○同廿七日日本海々戰第七週年紀念當日にて、特に海軍省より派遣せられたる海軍大佐大野房次郎氏の御講演を拜聴致候。

○翌廿八日の地久節は、例年の通り午前は莊嚴なる式これあり、夜は電燈まばゆき一堂に會して、或は餘興に或は音樂に心ゆく限り打興じて、いさゝか祝賀の意を表し申候。

○こゝに特筆大書して御報道申すべきは、六月三日畏多くも 皇后陛下の行啓を忝うし奉りし事に御座候。わけて拙き筆の口惜さは有難き事の數々描き出すべきすべも覺えず候へば何も何も止め置き候。但し大様はすでに新聞雜誌の報道其の他に御承知の事と存し候。實に我校への行啓の一事は廣く女子教育界の光榮と申すを得べく候、我等益、其の自分を務め聖旨の萬分の一にも報い奉らむことをひたすら期するもの

も自分等にて水を汲みてわかし、買物にも出かけ申し、水入らずにて誠に清き生活をつづけ居り候。然し私には到底家事の方面の誘導は出来申さず候へども、早晚家庭の人となるべき彼等に對し、精神的誘導には只管つとむる考におぼし候。やさしき子等は衷情より出でし忠告をよく容れ呉れ候へば、時にはありかたさに涙ぐむことさへ之れ有り候。

師範には八反田様、長谷川様御出で遊ばし候間よく御邪魔に參り、心ゆくばかり話し合ひ申候。(下略)

右は在宮崎高等女學校の賛助員上村靜氏より 客員千葉安良に送られし私信を、同氏の許可を請ひて掲げたるものなり。

◎三原便り

見渡す限り若葉青葉で、たゞ待宵草の淋しく人を待つて居るばかりの時節となりましたが如何お暮し遊ばすれますか。(中略)

さて附屬も敎生時代と違つて、自分のものとな

に御座候。

○終りに臨み諸姉の益々御清榮ならんことを御祈り申上候。

◎宮崎便り

(前略) 國語のみ四組(兩二年 兩三年)十八時間受け持ち居り候へども、同じ學科の事とて準備には時をとり不申候へども、日記添削物の多きには忙殺され居り候。

昨日は敎員會にて種々校風につきての議出で申し私も漸く當校の講堂が廣く見ゆるやう相成り候につき、所感と微衷とを申し述べ候處、幸ひに同情を得、研究の問題と相成り嬉しさに涙さへさしぐまれ候。(中略)

私は目下補習科生六名と學校近くに比較的清楚なる家を借り受け新世帯を營み居り候。家はさほど廣からず候へども、七人家内には先づ十分に候。庭園はひろく候うて、宮崎縣特有の杉の生垣に圍まれ、花壇あり、菜畝あり、梅の老木 椎の大木これあり、一寸風情これあり候、風呂

らば一層立ち入つて敎育せられて、御愉快な御事でお喜びませう。地方へ參りまして、殊に師範生を相手に致すにつけて、御校の生徒の無邪氣に、活氣があつて、文科的に進んで居るのが分りました、しかし私はすまなかつたことですが、御校の六週間は如何しても根本訓練に立ち入つて働くことができませんでした。それは私の不徳、しなかつたのでなくて能はなかつた所も大いにございます、また確かに致しませんでした、無遠慮に云ひますと、何處かに嚴肅な眞面目を缺いて居るやうに存じつゝけて、あきたらなくおぼいました。これ東京における生徒と云ふのではなくて、附屬一般の弊かも知れませぬが、そのあきたらなかつた感、三原の人となつて、十二分に満足せられませんでした。實に眞面目なところ、私は幾度生徒から警策を與へられるか分りません。然し、それに伴ふ弊は亦尠くありません。御校諸生の長所として、實に美しい無邪氣な活氣のあるところは、此處の生徒に多く見ることができません、私の受け持つて居る

のは、本科一年二組ですが、大層大人らしく、教師が近づきますと、戦々兢兢といふ態度で、これ等の點は改めさせねばならぬ處でございます。私は此生徒に對して自分が凡ての權能を與へられたるを感ずると同時に、其の知徳の貧しいのに想到して、戰慄を禁じ得ぬのでございます。しかしそれについては、「教師はよろしく生徒の面前に披瀝するものゝ十倍の蘊蓄なかるべからず」と云ふことにおもひ到る時は中々近き將來に望み得ないことながら、教ふるこそそのものに就いてはできるだけ研究して多少確信をもつて教室にのぞみつゝ愉快に鞭を執つて居ます。どうぞしても「我れは彼等の模範たる者である」といふ勇氣自信のない處のもの、それは道德修養の一つでございます。(下略)

右は在三原女子師範學校の賛助員筒井たか氏の客員千葉安良に送られし私信の一節なり。筒井氏の許可を請うて掲げたり。

●小樽便り

(上略) 小樽は船舶の多きほどに書物のなきところ候。御融通つき候節は御配慮下され度候。私は一年生の主任にて、國語、地理、作文、修身、作法、三年の地理をうけもち居り候。文科會には御差し支へのなき限り出席して上げて下されたく、又相談相手になつて上げて下されたく、又時々心配して上げて下されたく願ひ上げ候。部長は下村先生にお代りの由。前には、文科會々誌を産み出した幹事として私は本當に感謝致し居り候。其の後文科會につきて何か御話これあり候や。伺ひ上げ候。北海道の歌はあまりにみすばらしくて、自分ながら、よみたくなくなり申候。然し毎日新らしい經驗ばかりにて、私をそゝり申候ふもの絶えず候。

やわらかき二葉に抱かれ幸多き
明日を夢みるすゝ蘭の花。(鈴蘭に添て)

●前號 正誤

頁	行	正	誤
七十三	二	おん咳の	たん咳の
九十三	下九	釋話	釋話
九十九	上十六	商權	商權
同	下十三	王通	手通
同	同十六	薛瑄	薛瑄
一〇〇	上十二	纂話	纂話
同	下三	李昉	李昉
同	同八	明透	明透
同	同二	古文典刑	古文典型
同	同三	國朝二十四家文抄	國朝二十家文抄

以上は在小樽高等女學校の賛助員河崎なつ氏より客員千葉安良に送られし私信の一節を。河崎氏に許可を請ひて掲げしものなり。

此度下村先生よりの御話にて。本誌の編輯の一部を御手つだひ致すことと相成り申し此の原稿も認め申候。御言葉確かに拜承、できる丈は成を守りてます。これに榮えしむることにつくすべく候。但し微力の及ばぬ處は幾重にも御許し下され度候。

千葉安良

